少年少女日本文学館 9

幼年時代・風立ちぬ

ようねんじだい　かぜたち

yōnenjidai kazetachinu

murou saisei satō haruo

hori tatsuo

室生犀星（むろうさいせい）
佐藤春夫（さとうはるお）
堀辰雄（ほりたつお）

少年少女日本文学館 9

幼年時代・風立ちぬ

室生犀星 佐藤春夫 堀辰雄

講談社

913

室生犀星　佐藤春夫　堀 辰雄

少年少女日本文学館　9

幼年時代・風立ちぬ

講談社　1986

326p　23cm

内容：幼年時代　西班牙犬の家　實さんの胡弓　おもちゃの蝙蝠　わんぱく時代(抄)　風立ちぬ

むろうさいせい　さとうはるお　ほりたつお

少年少女日本文学館
第九巻
幼年時代・風立ちぬ

定価　一四四〇円
（本体　一三九八円）

一九八六年　九　月二十五日　第一刷発行
一九九〇年　三　月　十二　日　第五刷発行

著　者……室生犀星　佐藤春夫　堀 辰雄
発行者……野間佐和子
発行所……株式会社　講談社
東京都文京区音羽二-十二-二十一
郵便番号　一一二
電話　東京（〇三）九四五-一一一一（大代表）

印刷所……株式会社廣済堂
製本所……黒柳製本株式会社

©室生朝子　佐藤方哉　堀　多恵　一九八六年

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。なお、この本についてのお問い合わせは、児童図書第一出版部あてにお願いいたします。

Printed in Japan

ISBN4-06-188259-7　（児一）

もくじ

室生犀星
幼年時代……9
佐藤春夫
西班牙犬の家……97
實さんの胡弓……111
おもちゃの蝙蝠……120
わんぱく時代(抄)……124
新聞雑誌縦覧所……124
口は禍の門……136
カッパの川流れ……149
校舎炎上……163

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

堀辰雄

風立ちぬ……179
序曲……179
春……187
風立ちぬ……207
冬……253
死のかげの谷……282

●解説――久保忠夫……306
●随筆――萩原葉子……314
●略年譜……320

◆この本の本文表記について

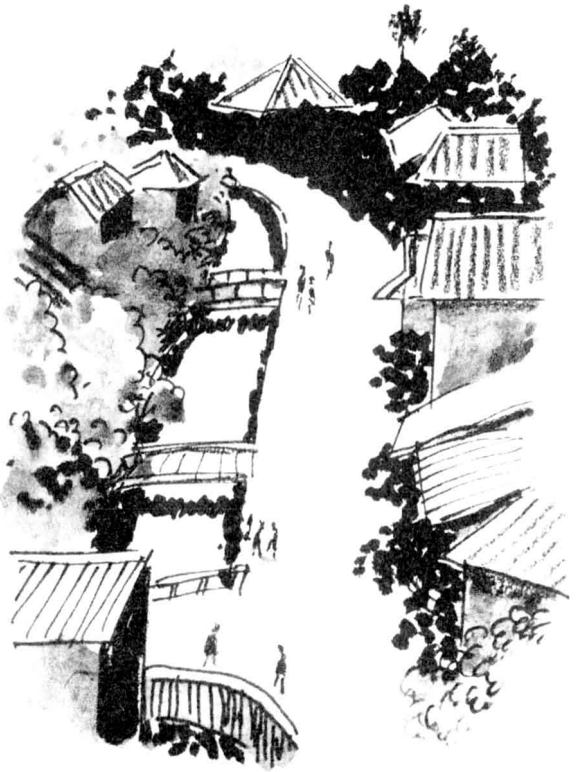
●現代かなづかい、現代送りがなを使用した。

●極端な宛て字と思われるもの、また代名詞・副詞・接続詞などのうち原文を損なうおそれが少ないと思われるものをかなにあらためた。

●本文は総ルビとし、むずかしい語句や事項には、小さな字で注を加えた。注と本文ルビが重なる場合は左側にルビをそえた。

●さらに説明を必要とする語句や事項には、＊をつけ、イラストやくわしい注をつけ加えた。

幼年時代・風立ちぬ



室生犀星

――幼年時代

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

幼年時代

一

私はよく実家へ遊びに行った。実家はすぐ裏町の奥まった広い果樹園にとり囲まれた小ぢんまりした家であった。そこは玄関に槍が懸けてあって檜の重い四枚の戸があった。父はもう六十を越えていたが、母は眉の痕の青々した四十代の色の白い人であった。私は茶の間へ飛び込むと、

「なにか下さいな。」

と、すぐお菓子をねだった。その茶の間は、いつも時計の音ばかりが聞こえるほど静かで、非常にきれいに整頓された清潔な室であった。

「またお前来たのかえ。たった今帰ったばかりなのに。」

と言って茶棚から菓子皿を出して、客にでもするように、よくようかんや最中を盛って出してくれるのであった。母は、どういう時も菓子は器物に容れて、いつも特別な客にでもするように、お茶と添えてくれるのであった。茶棚や戸障子はみなよく拭かれていた。私は長火鉢を隔たって坐って、母と向かい合わせに話すことが好きであった。

母は小柄なきりっとした、色白なというより幾分蒼白い顔をしていた。私は貰われて行った家の母より、実の母がやはり厳しかったけれど、楽な気がして話されるのであった。

「お前おとなしくしておいでかね。そんな一日に二度もきちゃいけませんよ。」

「だって来たけりゃ仕様がないじゃないの。」

「二日に一ぺんくらいにおしよ。そうしないとあたしがお前を可愛がりすぎるように思われるし、お前のうちのお母さんにすまないじゃないかね。え。判って——。」

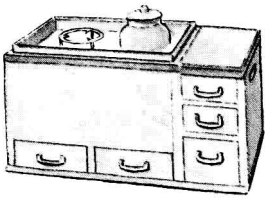
「そりゃ判っている。じゃ、一日に一ぺんずつ来ちゃ悪いの。」

「二日に一ぺんよ。」

私は母とあうごとに、こんな話をしていたが、実家と一町（約百九メートル）と離れていなかったせいもあるが、約束はいつも破られるのであった。

眉の痕の青々した（九ページ）
眉をそったあとが青いこと。当時、結婚した女性が眉をそり落とすという風習が残っていた。

長火鉢
火鉢は、炭をいけて暖房や湯などをわかすのに用いる。長火鉢は直方体のものをいう。



私は母の顔をみると、すぐに腹のなかで「これが本当のお母さん。自分を生んだおっかさん。」と心のそこでいつも呟いた。

「おっかさんはなぜ僕を今のおうちにやったの。」

「お約束したからさ。まだそんなことを判らなくてもいいの。」

と、母はいつも答えていたが、私は、なぜ私を母があれほど愛しているに関わらず他家へやったのか、なぜ自分で育てなかったかということを疑っていた。それに私がたった一粒種（ひとりっ子）だったことも私には母の心が解らなかった。

父は、すぐ隣の間にいた。しかし昼間はたいがい畠に出ていた。私はよくそこへ行ってみた。

父は、葡萄棚や梨畠の手入れをいつも一人で、黙ってやっていた。なりの高い（背が高い）武士らしい人であった。

「坊やかい。ちょいとそこを持ってくれ。うん。そうだ。なかなかお前は悧巧だ。」

と、父はときどき手伝わせた。

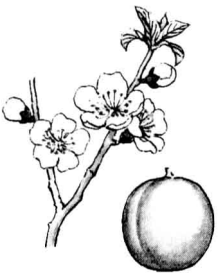
畠は広かったが、林檎、柿、すもも等が、あちこちに作ってあった。ことに、杏の若木が多かった。若葉のかげによく熟れた美しい茜と紅とを交ぜたこの果実が、葉漏れの日光に柔らかくおいしそうに輝いていた。あまりに熟れすぎたのは、ひとりで温かい音を立てて地上におちるのであった。

「おとうさん。僕あんずがほしいの。採ってもいいの。」

「あ。いいとも。」

私は、まるで猿のように高い木に上った。若葉はたえず風にさらさら鳴って、あの美しいこがね色の果実は私の懐中にも手にも一杯に握られた。それに、木に登っていると、気が清々して地上にいるよりも、何ともいえない特別な高いような、自由で偉くなったような気がするのであった。たとえば、そういうとき、道路の方に私と同じい年輩の友だちの姿を見たりすると、私は、その友達に何かしら声をかけずにはいられないのであった。自分のいま味わっている幸福を人に知らさずにいられない美しい子供心は、いつも私をして梢にもたれながら軽い小踊りをさせるのであった。

杏
ばら科の落葉高木。早春に淡紅色の花をつける。果実はそのまま食べたり、ジャムなどにする。



鞘
刀剣の身を入れる平たい筒。

手柄
刀剣の手で握るところ。

鮫
鮫皮（実際はあかえいに近い種の魚の皮）を乾かしたもの。刀の柄や鞘などに用いられた。

畠は、一様に規則正しい畝や囲いによって、たとえば玉菜の次に豌豆があり、そのうしろに胡瓜の蔓竹が一と囲い、という順に総てが整然とした父の潔癖な性格と、むかし二本の大小を腰にした厳格さの表れでないものはなかった。父の野良犬を追うとき、小柄でも投げるように、小石は犬にあたった。または烏などを趁う手つきが、やはり一種の形式的な道場癖をもっていて、妙に私をして感心させるような剣術を思わせるのであった。

父の居間には、その襖の奥や戸棚には、驚くべきたくさんの刀剣が納められてあった。私はめったに見たことがなかったが、ぴかぴかと漆塗りの光った鞘や、手柄の鮫のぼつぼつした表面や、×に結んだ柄糸の強い紺の高まりなどを、よく父の顔を見ていると、なにかしら関聯されて思い浮かぶのであった。

それに父は非常に健康であった。へいぜいは俳句をかいていた。父は葡萄棚から射す青い光線のはいる窓さきに、習字机を持ち出し

て、よく短冊をかいていた。幾枚も幾枚も書きそこなって、

「どうも良く書けん。」

などと言って、うっちゃることがあった。母はそういう日は、次の間で縫い仕事をしていた。れいの音一つない家の中には八角時計が、カタ・コトと鳴っているばかりであった。父も母も茶がすきであった。二人で茶をのんでいるとき、私も遊び友達に飽きてしまって、よくそこへ訪ねてゆくことがあった。

私はよく母の膝に凭れて眠ることがあった。

「お前ねむってはいかん。おうちで心配するから早くおかえり。」

と父がよく言った。

「しばらく眠らせましょうね。かあいそうにねむいんですよ。」

と、母のいう言葉を私はゆめうつつに、うっとりと遠いところに聞いて、幾時間かをぐっすりと睡り込むことがあった。そういうとき、ふと眼をさますと、わずか暫く睡っていた間に、十日も二十日も経ってしまうような気がするのであった。何も彼も忘れ洗いざらした甘美な一瞬の楽しさ。その幽遠さは、あだかも午前に遊んだ友達が、十日もさきのことのように思われるのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com